

仲間消えた島
リゾート地
「アウギユステ」

その場所から
送られてきた
映像は…

騎空団に大きな
衝撃を与えた

女たちの喘ぎ声が
響く空間で
映っていたのは

連絡が途絶えたいた
多くの団員達の
無残な姿だった

映っている者の中には
心が壊れるまで
犯された者

犯されながらも
諦めず抵抗を
続けている者

彼女たち全員が
催淫ガスの漂う空間で
あることも知らず

ただ「女」であるがゆえに
敗北してしまったのだ

すでに孕胎に
なってしまい
戦うことを諦めた者

丈夫な体を
持つがゆえに
様々な実験を
受けることとなる

その力は
根こそぎ奪われ

望まぬ出産を
繰り返すのだった……

様々な異形たちを
孕める体に改造された
彼女たちを待っていたのは

交配実験という名の「レイプ」であり

他の雌たち同様に
無防備になった卵子を
雄の子種に貫かれ

——六竜——
世界創世の頃より
存在する強大な竜

そんな巨大な力を持つ
六竜ですら
特異点不在の焦りと

幽世の操る
人の罫によって……

不覚を取るのだった……

「六竜の『金』と言っても
そうなってしまうのは
無様なものだな」

「やはりこの島に
張り巡らせた
媚薬は優秀……」

「雌」の体であれば
六竜ですら難なく
捕まえることが
できるとはな」

「背信……」
メイガス……やはり
裏切りましたか

「裏切る？」

「ラン、最初から
お前たちの仲間にならた
覚えなどない」

「全てはアスタロト様
復活のため……」

油断
まさか私がこんなに
簡単に捕つてしまうとは……

疑問
この島に入ってから
全身に力が入らない
まるで人の子以下に
なつたような……

思案
なんとかここを
抜け出して
皆にしらせないと
いけません



「まず邪魔な
特異点を墮とす
必要がある
そうなのだが…」

蠢動

「この蠢く触手…
これは一体…?」

「そのために
人や星晶獣の力を
集めたが、まだまだ
足りんらしくてな」

「さらに巨大な力を持つ
貴様ら六竜からの
力も必要になったのだ」

陰謀?

特異点を墮とす…?
殺すためではなく…?

そのために
六竜の力を…?

刺激

「う…ッ
胸と膣に…触手が…っ!」

「フフフ…」

「人の子袋を
持っている
今でしか
味わえない」

「星晶獣ですら
狂う程に
増幅した快楽」

鈍痛っ!!

「乳首が引つ張り
出されて…っ!」

「たっぷりと
味わうがいい」

——絶頂——
子宮と胸から力が
奪われて……ッ!!

この耐えがたい感覚の奔流……
ダメ……抗えない!!
思考が真っ白につ!!

「あああああッ!!」

搾取

体の芯から
力が消えていつているのに……
これが……「女」の快楽……!!

否定

「あああッ……
そんな……こと……
ありま……せん……ッ!!」

「こんなに
卑猥らしく乳首を
立てながら
言われてもなあ」

「はははは!!
いいぞさすが六竜!
大した力だ!」

「ヨダレのように
マンコから
溢れ出してくれる
ではないか!!」



「説得力に
欠けると」

「いうものだっ!!」

「はははっ!!
傑作だ!!」

「圧迫
胸への吸収が
さらに強くっ!!」

「あの六竜が
快楽で喘ぐ姿が
見れるとはな!」

「次の絶頂で
二度と顕現体から
竜の姿に戻れなく
なる程の絶頂と呪いを」

「子宮に烙印として
刻みこんでやる!」

抵抗
「あぐっ...やめ...
やめなさいっ!!
あっあああっ!!」

苦悦
絶頂...!!

もう絶頂する
わけには...!!

思い通りにさせる
わけにはいかないのに...っ

「でも...
また昇ってくる...」

あああ...ダメ...
ダメダメ!! 負ける...
六竜である私が...っ!!

「あははははっ!!
さあ、果てるがいいっ!!」





「ははははッ!!
いいぞ
実にいいイキっぷりだ」

「だがまだ始まったばかりだ」

「腹に植え付けた淫紋がお前の子宮をゆっくりと侵しながら改造してくれる」

「そうなれば
どんな種族と交配しても
孕めるようになる」

「自身の子に
力を注げるのだ」

「貴様なら
願うでもない
ことだらう?」



「せっかく刻んだ淫紋だ...」

「孕み袋となる前に」

「雌として教育してやらねばな」

「さあ歓喜の声を
上げながらイケー!」

不覚...

申し訳ありません...

特異点...